

## 地方における新たな検査機会の開発

### -医療者からの検査推奨による MSM の検査受検環境改善-

研究分担者：健山正男（琉球大学大学院医学研究科 准教授）  
研究協力者：宮城京子、前田サオリ（琉球大学医学部附属病院看護部）、  
仲村秀太（琉球大学大学院医学研究科）

#### 研究要旨

研究者は、平成 26 年度～平成 28 年度の当研究者が実施した先行研究の検討から男性同性間感染者（Men who have sex with men：MSM）における HIV 陽性者は、MSM コントロール群に比して下記の特徴があると下記の仮説を提唱した。令和元年度は下記の帰無仮説を検証した。

仮説 1：「医療側が HIV 急性感染期に受診している患者に HIV 検査を誘導できている」

仮説 2：「医療側が性感染症の診療時に適切に HIV 検査を勧奨できている」

対象者：2015 年以降に HIV 陽性が新規に判明し琉球大学に通院している MSM 患者。

結果：対象患者の 60 名に対して、46 名（76.7%）に調査用紙を配布し、30 名が回答した（回収率 65.2%）。

30 名中急性感染症状を記憶し、医療機関を受診した 17 名（56.7%）中、13 名（86.7%）が HIV 検査に誘導されていなかった。性行為感染症（Sexually Transmitted Infections：STI）では 30 名中 20 名（66.7%）が罹患時には受診していたが、12 名（60%）は医療者より HIV 検査を勧められていなかった。仮説 1 は棄却された（pearson  $p=0.001$ ）。仮説 2 は棄却できなかった。

#### A. 研究の目的

仮説 1：「医療側が HIV 急性感染期に受診している患者に HIV 検査を誘導できている」

仮説 2：「医療側が性感染症の診療時に適切に HIV 検査を勧奨できている」

上記を検証する。

#### B. 研究方法

2015～2019 年末までに新規で HIV 陽性と判明し琉球大学に通院している患者を対象とした。調査用紙の受け取りを承諾した患者に、調査用紙を渡し、院外で匿名自記式調査用紙に記入後、主任研究者の名古屋市立大学看護学部宛てに投函する。統計的解析はロジスティック解析をおこなった（SPSS バージョン 19）。

#### C. 研究結果

対象患者の 60 名に対して、46 名に調査用紙を配布し、30 名が回答した（回収率 65.2%）。

##### 1. HIV 検査の勧奨について（ $n=30$ 名）

回答した 30 名中、急性 HIV 感染症状を記憶した 17 名（56.7%）のうち（図 1-1）、医療機関を受診した者は 15 名（88.2%）であった（図

1-2）。そのうち HIV 検査に誘導されたのは 1 名（6.7%）で 86.7%は有意に HIV 検査に誘導されなかった（pearson  $p=0.001$ ）。1 名は HIV 検査を勧奨されたが断った（図 1-3）。

2. 性行為感染症（Sexually Transmitted Infections：STI）時の HIV 検査の勧奨について  
30 名中 20 名（66.7%）が罹患し受診していたが、12 名（60%）は医療者より HIV 検査を勧められていなかった（図 2-1、2-2）。

##### 3. HIV 陽性告知を受けた機関（ $n=30$ 名）

病院が 70%、保健所・検査センター 23.3%、  
医院・クリニックと郵送検査がともに 3.3%であった（図 3）。定期的自主検査として受検したのは 2 名（6.7%）であった。

##### 4. 陽性判明前の受検経験（ $n=30$ 名）

有り 46.7%、無し 53.3%。有りと回答した 14 人中、最終受検時期は 1 年以内と回答したのは 3 名（21.4%）、1 年以上前は 2 名（14.3%）、2 年以上前は 8 名（57.1%）であった（図 4-1、4-2）。

#### 5. 受検のきっかけ (n=30名 複数回答)

体調不良が最多で 70.0%、次いで HIV 関連の自覚症状 36.7%、術前検査、性感染症などが多く、本人の自主的検査はわずか 6.7%であった (図 5)。

#### 6. 受検しなかった理由 (n=16名 複数回答)

結果を知るのが怖かった者は 14名 (87.5%)、面倒だった 8名 (50.0%) であった。恐怖感と受検率には有意な相関を認めた  $p=0.028$ 。

(図 6)

#### 7. 陽性判明前の情報の認知度

a) 「治療による生命予後が非感染者と同じに改善する」

b) 「治療費の医療補助制度の存在」

a) を認知していたのは 17名 (56.7%)、b) を知っていたのは 9名 (30.3%) であった。

a) と b) の知識の共有率は有意に相関を認めた ( $P=0.042$ )。

受検率に及ぼす a) および b) の知識の認知度については有意な関連は認めなかった。

#### 8. 感染する可能性の自覚と受検率 (n=30名)

感染する可能性について、全く無かった者が 12名 (40%)、強く自覚していた者が 2名 (6.7%)、であった。感染自覚の高さと受検率には有意な相関は認めなかった。

#### 9. 陽性判明前のコミュニティセンターの認知度

知らなかった者は 13名 (43.3%)、訪問有りは 1名 (3.3%)、知っていたが訪問無し 16名 (53.3%)。コミュニティペーパーの認知度は 9名 (30.0%) であった。

#### D. 考察

研究対象者のリクルートの精度は、対象患者の 76.7% にアンケートを配布して有効回収率は 30名 (65.2%) と高い精度で施行出来た。

急性 HIV 感染症を自覚した者は 88.2% と高い頻度で医療機関を受診しているが、医師より HIV 検査を勧奨されたのは 2名 (13.3%) のみで、86.7% の感染者が個人的診断の機会および公衆衛生的伝播防止の機会を喪失していたことが明らかとなった。

性病の診断時にも同様のことが指摘出来、60.0% が HIV 検査を勧奨されなかった。2019 年より梅毒の届出時には HIV 検査の有無を記載する欄が追記されたので、改善されることが期待される。

陽性告知を受けた機関は、当県では保健所が 7名 (23.3%) と高いが、詳細をみると無症候性でセクシャルヘルスの観点から定期的自主検査として受検したのは 2名 (6.7%) と低く、検査機会が少ない地方では、クリニックや病院検査の代替として保健所検査を利用していることが判明した。

受検勧奨に有用と思われる知識・情報の認知度は受検率に影響しなかった。しかしながら陽性への恐怖感を受検率の低下に有意に影響したことを検討すると、HIV 感染は社会、コミュニティからの孤立あるいは人生設計からの離脱に対する恐怖感が主であり、今後の研究では「質問内容も恐怖感を緩和するキーワード」を検証することが重要と考えられた。

#### E. 結論

仮説 1 は棄却された。仮説 2 は棄却出来なかった。受検の向上に結びつく情報を明らかにすることが重要である。

#### F. 研究発表

##### 1. 学会発表 (国内)

1) 健山正男：トキゾプラズマ症の現況と課題。シンポジウム 5、第 33 回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019。

2) 上原 仁、諸見牧子、与那覇房子、前田サオリ、宮城京子、石郷岡美穂、大城市子、辺士名優美子、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、中村克徳：ラルテグラビル 1200 mg とプロトンポンプ阻害薬との併用による有害事象が疑われた一例。第 33 回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019。

3) ○岩橋恒太、金子典代、高野 操、岡 慎一、本間隆之、健山正男、玉城祐貴、市川誠一、荒木 順、木南拓也、生島 嗣、佐藤郁夫、福原寿弥、林田庸総、中山保世、小日向弘雄、今村顕史：MSM を対象とした郵送検査キット用いた HIV 検査「HIVcheck.jp」のベニューの拡大の試行。第 33 回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019。

4) 前田サオリ、宮城京子、仲村秀太、名嘉山賀子、健山正男、上原 仁、石郷岡美穂、大嶺千代美、藤田次郎：HIV 感染および肺結核が判明した外国人母子の療養支援。第 33 回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019。

5) 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡 慎一、湯永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀

場昌秀、太田康男、茂呂 寛、渡邊珠代、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦 互、吉村和久、菊池 正：国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019.

6) 饒平名聖、石原美紀、島袋末美、渡嘉敷良乃、名護珠美、上原 仁、宮城京子、前田サオリ、仲村秀太、健山正男、前田士郎：当院におけるHIV-1インテグラーゼ薬剤耐性検査の検出状況報告. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019.

7) 仲村秀太、健山正男、名嘉山賀子、上原 仁、前田サオリ、宮城京子、藤田次郎：一次結核を発症した生後7ヶ月のHIV陽性乳児においてTDMによるラルテグラビル投与量設定が奏功した1例. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019.

### 3. 学会発表 (国外)

1) ○Kota Iwahashi, Noriyo Kaneko, Misao Takano, Shinichi Oka, Takayuki Honma, Masao Tateyama, Seiichi Ichikawa, Jun Araki, Takuya Kinami, Yuzuru Ikushima, Ikuo Sato, Toshiya Fukuhara, Tsunefusa Hayashida, Nakayama Yasuyo, Hiroo Obinata, Akifumi Imamura: Dry Blood Spot-Based HIV Testing ‘HIVcheck.jp’ is a New Testing Opportunity for Men who have Sex with Men in Tokyo, Japan. FAST-TRACK CITIES 2019, LONDON, September, 2019.

### G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

#### 1. 特許取得

無し

#### 2. 実用新案登録

無し

#### 3. その他

無し

図1-1. HIVの急性期症状の有無(n=30)

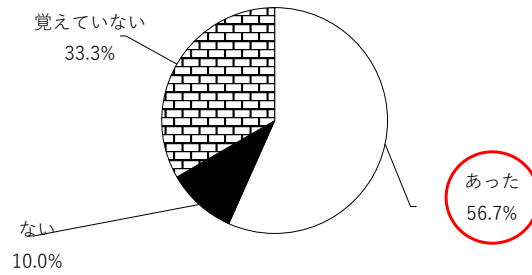


図1-2. 急性期症状をきっかけに受診したか (n=17)

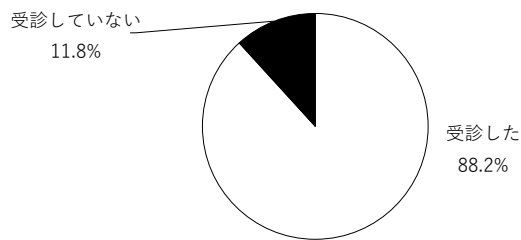


図1-3. 急性期症状による受診時にHIV検査を勧められたか(n=15)

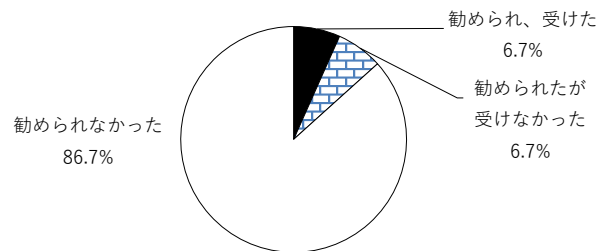


図2-1. 性病罹患による受診時にHIV検査を勧められたか(n=20)

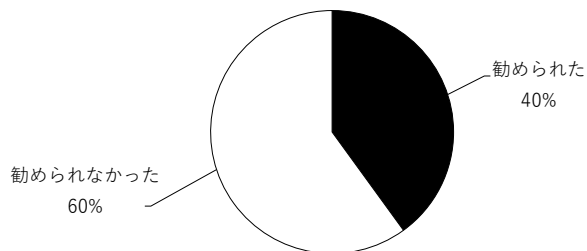


図2-2. 勧められた検査を受けたか(n=9)

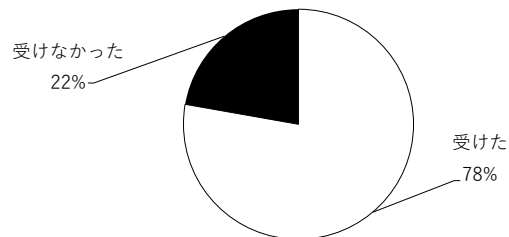


図3. 陽性の告知を受けた機関(n=30)

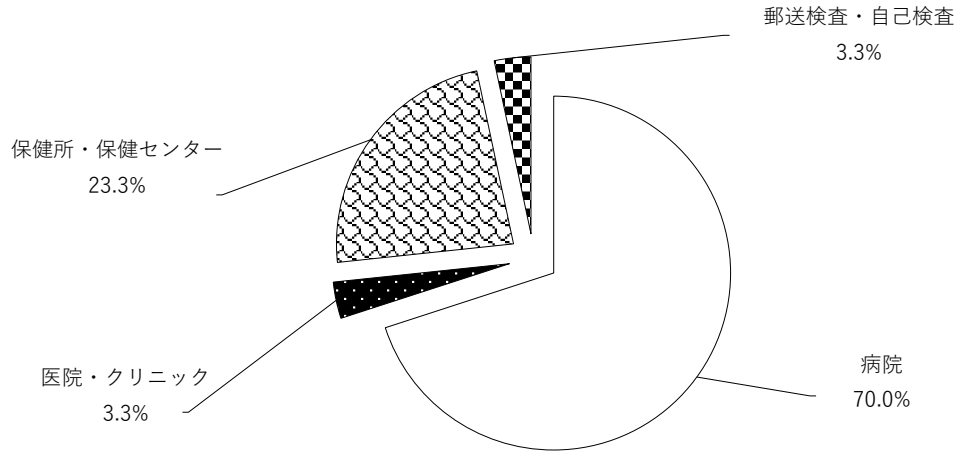


図4-1. 陽性判明前の受検経験(n=30)

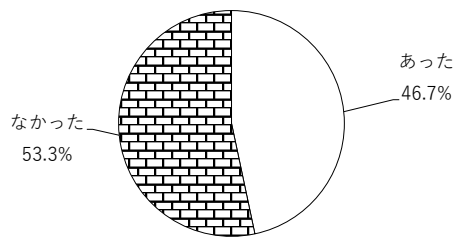


図4-2. 陽性判明前の最終受検時期(n=14)

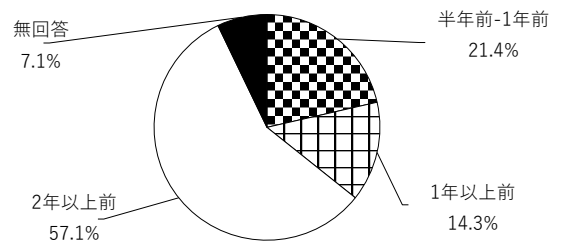


図5. 受検のきっかけ（複数回答）（n=30）

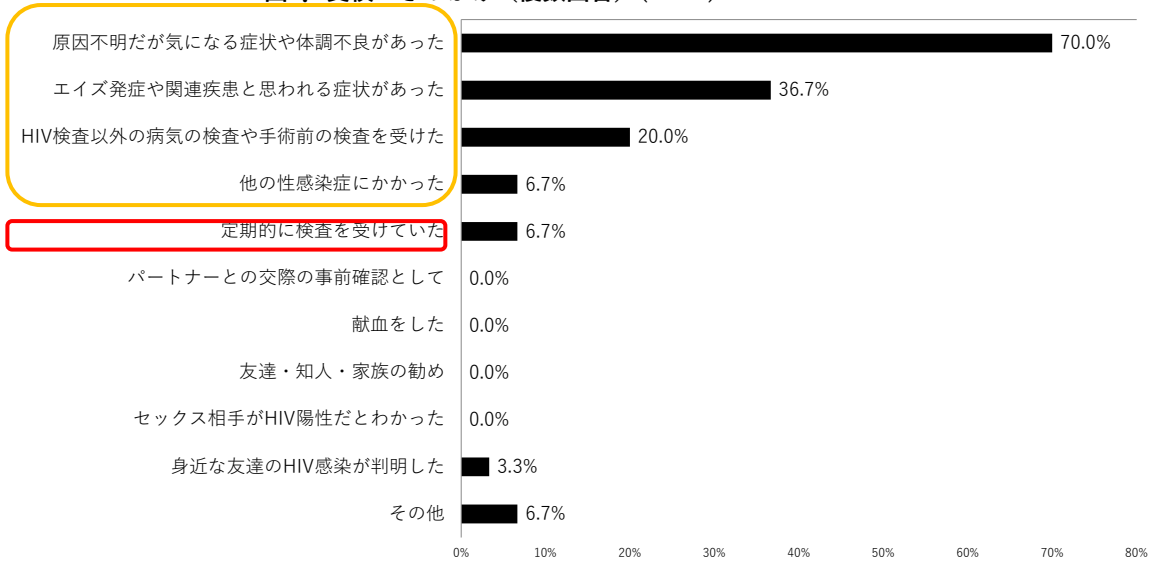


図6. 受検しなかった理由（複数回答）（n=16）

